決定、第33回写真の町東川賞

円卓を囲み、投票を繰り返し、作品内容から、賞の性質まで、多角的な意見交換と議論を重ねながら、各賞が決定された。審査委員それぞれの意見の食い違いはあっても、議論を尽くして決定していくのが、東川賞審査会の伝統的なスタイルだが、審査委員の3人が昨年度で退任、新たに3人が就任した本年度も、このスタイルは引き継がれている。そして審査会は、「写真文化首都」にふさわしい素晴らしい作家たちを選出できたと自負している。

このような、変化しつつ伝統を継承していく在りようは、まさに東川町の特徴でもあるように思われる。東川賞もまた、1985年の「写真の町宣言」から30余年、一歩一歩積み重ねた町の人たちの努力と、そうした趣旨に共感した世界中の多くの人たちの共感の上に成り立っていることを実感する。

「おいしい水」「うまい空気」「豊かな大地」という素晴らしい環境を誇りにする東川町は、「この小さな町で世界中の写真に出逢える（であえる）ように、この小さな町で世界中の人々と触れ合えるように、この小さな町で世界中の笑顔が溢れるように」というビジョンを現実化する魅力に満ちている。受賞した素晴らしい作家たちを加え、東川町の人々とともに、また新たな一歩を踏み出していきたい。

第33回写真の町東川賞審査講評
写真の町東川賞審査会委員
上野　修

第33回写真の町東川賞審査会委員は次の通り。（敬称略、五十音順）
▼浅葉克己（アートディレクター）▼上野修（写真評論家）▼楠本亜紀（写真評論家、キュレーター）▼中村征夫（写真家）▼丹羽晴美（学芸員、写真論）▼平野啓一郎（作家）▼光田由里（美術評論家）

〈国内作家賞〉
本橋　成一（もとはし　せいいち）
＝東京都在住＝

1940年東京都東中野生まれ。63年自由学園最高学部卒業。65年東京綜合写真専門学校卒業。東京綜合写真専門学校の卒業制作として撮影をはじめ、その後数年にわたり九州や北海道の採炭地に通い炭鉱住宅の日々を撮影した「炭鉱（ヤマ）」で、1968年に第5回太陽賞を受賞。チンドン屋、寄席芸人、大衆演劇など、失われつつある大衆文化・芸能を記録した「藝能東西」（1972年）、東京と東北を結ぶ玄関口として、様々な人が行き交ったターミナル駅としての最後の風景を撮影した「上野駅」（1980年）、大阪・松原市の新旧屠畜場で働く人々を記録した「屠場（とば）」（1986年）など、市井の人々のたくましく豊かな生きざまをとらえてきた。1991年からはチェルノブイリ原子力発電所の被災地ベラルーシを何度も訪れ、汚染地域で暮らす村民を記録した「無限抱擁」（1995年）で日本写真協会賞年度賞、写真の会賞を受賞。98年「ナージャの村」で第17回土門拳賞受賞。同地で映画「ナージャの村」（1997）「アレクセイと泉」（2002）を完成させた。2015年には長野県小谷村の集落で、多様な背景を抱えた人たちが農業を中心とした共同生活を送る「真木共働学舎」を舞台にしたドキュメンタリー映画「アラヤシキの住人たち」を公開。

主な個展に「ナジェージダ―希望」（東京都写真美術館、2002年）、「在り処」（IZU PHOTO MUSEUM、2016年）など多数開催している。

〈海外作家賞〉
アンナ・オルオーヴスカ（Anna Orłowska）＝ポーランド・ワルシャワ市在住＝

1986年ポーランド南西部のオポーレ生まれ。2011年、ウッチ映画大学の写真学部修了。2013年、チェコのクリエイティブ・フォトグラフィ・インスティテュートを卒業。2010年、スイス、ローザンヌのエリゼ写真美術館で開催され世界各地を巡回した、30カ国から80人の気鋭の若手写真家を選んだ「ReGeneration2:Tomorrow's Photographers Today」展の出品作家に選ばれる。

2013年、フランスのイエール国際モード&写真フェスティバルのフォト・グローバル賞を受賞。ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアルアーツでの1年間のレジデンス権を与えられる。

ウッチ映画大学の修了制作「Leakage」（2011）は、木に横たえられた赤ちゃんや、ゾンビのような人物が混じる集合写真など、静ひつでどこかシュルレアルなイメージからなる。2015年にアルル写真フェスティバルで展示されるなど注目を浴びている。「Case study：invisibility」（2012―2014）は、映画「透明人間」のスティルや、町はずれに隔離された精神病者の施設、ピンクのユニコーンなど「見えないもの」を巡るさまざまなケーススタディー。近作のシリーズ「Effortless exercise」（2016―）では、パラフィンを写真の表面に塗り、温度の変化によって下の画像が見えてくる作品なども制作している。

日常における「見えないもの」をテーマに、隠れた意味や無意識、怖れ、ファンタジーなどを現実とイリュージョンの境目のなかに探っている。

〈新人作家賞〉
野村　佐紀子（のむら　さきこ）
＝東京都在住＝

1967年山口県下関市生まれ。1990年九州産業大学芸術学部写真学科卒業。翌年より荒木経惟に師事。1993年初の個展「針のない時計」（egg gallery）を開催以降、東京を中心にヨーロッパ、アジアでも精力的に個展、グループ展を行っている。

初の写真集『裸ノ時間』（平凡社、1997年）は、ベッドに横たわる裸体の男性を中心としたモノクロームの写真で、暗闇に差し込む淡い光のなか、濃密な時間と空間がとらえられている。初のカラーフィルムを使用した『夜間飛行』（リトルモア、2008年）は超小型カメラで7年にわたり撮影されたもの。これまで作品集としてまとめられることのなかった夜の風景写真を中心に、裸体の男性が湿り気のある空間で密やかに写されている。2013年、『NUDE/A　ROOM/FLOWERS』（マッチアンドカンパニー、2012年）でさがみはら写真新人奨励賞受賞。長年モデルを務めた友人の遺影に始まり、ヌード、ポートレート、風景、子ども、花など、20年以上に及ぶ作品から選ばれた、さまざまなモチーフの写真で織りなされた写真集は、親密で静謐な世界にひそむ生と死の予感に満ちている。

2016年には6名の男性モデルと濃密な3日間を過ごすなかで生まれた写真展「雁」（BATSU ART GALLERY）を開催。同年に刊行された写真集『もうひとつの黒闇　Another Black Darkness』（Akio Nagasawa Publishing、2016年）は、先行する『黒闇　Black Darkness』（2008年）等のイメージをソラリゼーションによって制作した実験的なシリーズ。闇のなかから浮かび上がる裸体や外界の風景のなかに、普段は閉ざされた奥深い感情や揺らぎをとらえる作品の発表をつづけている。

『Cord』（窓社、2003年）を刊行。2007年、自分の存在を確かめようとする日本全国の若者約50人を撮影した『am』（赤々舎、2007年）で第33回木村伊兵衛写真賞を受賞。世界に潜む崇高な美しさを写真にとらえようとした『ataraxia』（青幻舎、2010年）、『世界』（赤々舎、2012年）、命の誕生の時間を赤裸々に撮りおさめた『MOTHER』（柏艪舎、2014年）など、精力的に作品を発表している。

『1999』（ナガトモ、2015年）は、写真学生だった1999年に原風景ともいえる故郷の北海道で撮影した写真をもとに、現在の感性と最新のデジタル技術を融合させて作った写真集。

2011年からは根室市からの委託により、根室半島沖に浮かぶユルリ島（無人島）に生息する野生馬の撮影を続けている。かつて「馬の楽園」といわれたユルリ島には、1950年ころに昆布漁の労力として馬が持ち込まれた。1971年に最後の漁師が島を去り、無人島となったいまでもその子孫が生きている。

現在では数頭を数えるのみとなった消えゆく運命の馬たちを、北海道の大切な文化や歴史の証として記録に残す試みを続けている。2014年北海道文化奨励賞受賞。

〈飛弾野数右衛門賞〉
小関　与四郎（こせき　よしろう）
＝千葉県旭市在住＝

1935年千葉県匝瑳郡栄村（現匝瑳市）生まれ。新制中学を卒業後、自転車店に年季奉公しながら、写真を独学で始める。カメラ雑誌の写真コンテストに応募し、入賞を重ねる。1962年、『カメラ毎日』に漁婦を写した「暖をとるオッペシ」を発表、同年間賞受賞。1967年に千葉県横芝町で写真店を開き、経営をしながら写真を撮り続ける。

1973年、長大な遠浅の海が続く漁港のない九十九里浜で、船の揚げ降ろしや魚の荷揚げの手助けをする「オッペシ」と呼ばれる漁婦や、「フナガタ」と呼ばれる船に乗る漁夫の、海と共にたくましく生きる姿を歳月をかけて撮影した写真集『九十九里浜』（木耳社、1972年）で日本写真協会新人賞受賞。

主な写真集に、開港までの反対闘争も含めた成田空港を写した写真集『成田国際空港』（木耳社、1982年）、失われゆく九十九里浜の自然、海の生活を写真と文